

短 篇 の 構 造 に つ い て

——トーマス・マンの初期短篇の場合——

小 林 繁 吉*

Literarische Strukturanalyse über Thomas Manns frühe Erzählungen

Shigekichi KOBAYASHI

序

トーマス・マンの初期短篇の構造についての分析をしていくのであるが、短篇そのものを自律、独立した一個の作品として扱っていった場合、非常な困難に直面する。論文を書く際の材料、資料が作品が短ければ短い程少なくなり、分析方法自体も通用しない程に、解釈、研究が作品そのものから離れてしまい、不正確で曖昧なものになってくる傾向が見られるからである。このことは問題なのであるが、逆に言えば、既に解釈がなされたテーマに新しい視点を与える機会になっていくとも言える。

そこで目的と方法の意識化がなされれば、古典的文学論あるいは科学的方法論と称するものになる。対象を明確にし、その限定を行ないつつ、どのような意図、目的で、どういう方向を取るのかという状況設定から、その目的に向かう方法が模索されていく様になっていく。完全にというわけではないが、目的と方法はある程度分離しており、方法・手段とは目的、すなわち目標地点に対するいくつかの道のうちの最短距離をもつ最良の道の一つを目差したものになるという考え方に通じていくのである。そしてこれは最適最良、合理性という様な一つの考え方

による発見の過程となっていくのである。目的があって初めて方法が確立される。方法論が独自に存在して目的に使用されるというのではないのである。これは極普通の考え方で無論正しい一つの学問的態度と言うべきであろう。構造主義的考え方の基本にも、全体志向性、相互変換機構、無矛盾性があったのであり、科学的態度を取っていかうとしていく場合にこの事は最優先して考えなければならない事だったと思われる¹⁾。しかし、これらはすべて客観的真理、真実を目差しているものであり、「真(まこと)」が最大目標だったことに起因している。美、善、聖を目標とすべき、芸術、文学、道德、倫理、宗教までもが、この真理の方向に向かい、あるいは真理の鏡に照らされ、真実による吟味を受けて、「真(まこと)」の入っている言葉で表現されなければならなかったのである。何が真理であるかという事は別にして。文学研究そのものに、必然的にその様な制約が入っており、そのために「文学」そのものが苦悩してきたし、また現在でも苦悩、呻吟していると言える。それでは方法論との関係でこの「文学」をどの様に考えればよいのか。この「文学」研究方法論においては²⁾、他の多くの諸科学とは異なって、積極的な意味での従来の目的・方法意識はないのではないかと考えたい。目的と方法とがもともと一体になっているのではない。それははじ

昭和 58 年 12 月 12 日受理
一般教育部講師